

触知可能な頸部腫瘤を伴った原発性上皮小体機能亢進症 の猫の 1 例

伊藤哲郎^{1)†} 茅沼秀樹²⁾ 斑目広郎¹⁾

1) 麻布大学附属動物病院 (〒252-5201 相模原市中央区淵野辺 1-17-71)

2) 麻布大学獣医学部 (〒252-5201 相模原市中央区淵野辺 1-17-71)

(2021年3月26日受付・2021年11月8日受理・2022年1月15日公開)



本文はこちら

要 約

16歳齢、去勢雄の雑種猫が食欲不振、体重減少を主訴として来院し、頸部腹側に2cm大の皮下腫瘤が触知された。血液検査において総カルシウム及びイオン化カルシウムの高値を認めた。症例のintact上皮小体ホルモン(parathyroid hormone: PTH)は基準範囲内であったが、実験的に高カルシウム血症を誘発した健常猫において報告されたintact PTHと比較すると高い値であり、血清イオン化カルシウム濃度に対応したPTH抑制調節の破綻が推測された。画像検査により頸部腫瘤は腫大した上皮小体であることが疑われた。外科切除した腫瘤は病理組織検査において上皮小体腺腫と診断された。術後に総カルシウム値及びイオン化カルシウム値は速やかに正常化し、2年間の観察期間に再発は認められなかった。——キーワード：猫の原発性上皮小体機能亢進症, intact PTH, 頸部腫瘤。

-----日獣会誌 75, e14~e17 (2022)